

(西暦) 2022 年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること)

急性期病棟において意思疎通困難な患者に関わる看護師の実践の成り立ち

学位の種類: 修士 (看護学)

東京都立大学大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 看護科学域

学修番号: 21894705

氏名: 武田 ひかる

(指導教員名: 西村 ユミ教授)

注: 1 ページあたり 1,000 字程度 (英語の場合 300 ワード程度) で、本様式 1~2 ページ (A4 版) 程度とする。

1. 背景

急性期病棟において、患者が脳の損傷や重篤な疾患などにより意思疎通が困難となっている場合、看護師は患者からの訴えを手がかりとして状態や変化を捉えることが難しく、実践には困難や葛藤が生じることがある。しかし、看護師は患者や周囲の状況から感じ取っていることや、他の医療者に伝えられたことを日常的な実践に活かしており、それらは自覚したり言語化したりすることが難しいために、気づかれにくいものであった。

2. 目的

急性期病棟において意思疎通困難な患者に関わる看護師が、患者をどのように捉えて実践しているのか、その場の状況や周囲の人々との関わりを含めてその成り立ちを明らかにする。

3. 方法

脳神経外科・脳神経内科病棟に勤務する4名の看護師を研究参加者とし、参加観察とインタビューを組み合わせたフィールドワークを行った。得られたデータは、現象学を手がかりに分析を行った。なお、本研究は、東京都立大学荒川キャンパス研究倫理委員会の承認 (承認番号: 21083) を受けて実施した。

4. 結果・考察

一人ひとりの研究参加者の実践について、意思疎通困難な患者との関わりに焦点を当てつつ、事象の流れに沿って詳細に記述した。

結果の記述をもとに、患者が言語や振る舞いを通して何かを訴えることが難しいからこそ浮かび上がってきた「患者をみていく実践」の成り立ち」「看護師同士のペアによって成り立つ実践」の二つの切り口から考察をした。看護師の側から気にかけるべき存在である患者に引き寄せられた先で、看護師は自ら経験している人としての患者の現れに促され、共に経験を成り立たせたり、時間性や身体の可能性を開いたりしていた。一人ひとりの看護師と医療者がもつ地平とその限界は、自らが経験していない部分を埋めることを要請し、方向性をもって患者を把握することを促していた。このように、時間的、空間的な広がりをもって患者や他の医療者に働きかける実践は、その場で見ることにとどまらない、「患者をみていく実践」であった。また、ペアとなった看護師たちは、一方の行為に促されながら二人で一つの実践をつくっており、そこでは患者を含めた相互作用が成り立っていた。

本研究の記述は、急性期病棟における日常的な実践や患者との関わりを振り返るきっかけとなり、教育者及び実践者に新たな視点を提示する。今後の課題は、本研究で十分に記述できなかった家族との関わりを探究すること、そして急性期医療の要請によって習慣化された態度を自覚することで、より豊かな看護師たちの経験を明らかにすることである。